

# 翁童のコスモロジー 翁童論Ⅳ

鎌田東一氏の「翁童論」四部作が十二年の歳月を経て完結した。一九八八年刊行の『翁童論』、そして九年〇年の『老いと死のフォークロア』、そして十年の間をおいて相次いで刊行された『エッジの思想』、『翁童のコスモロジー』。四冊を合わせると実に二千四百ページの厚みである。

翁童、すなわち老人と子どもは、大人を中心とした社会の中では周縁に位置する存在だ。子どもは未熟な大人であり、老人は衰えた大人である。しかし、子どもと老人はむしろ「翁童存在」として一体のものであり、むしろそこにこそ人間のたましいの原初的現れがあるのではないか。なぜならば子どもと老人は、生と死のサイクルの中ではもつとも異界に近く、カミに近い、聖なる存在であるからである。

このように鎌田氏の翁童論は「異界性」を高く評価するところから出発した。しかしその議論は三作目において大きく転回する。操作された「異界」への盲信が暴力を結果したオウム真理教事件、そして自らの内部の「異界」に支配され、犯罪を犯したあの酒鬼薔薇聖斗少年の事例が説かれるのである。

飛翔へのエネルギーに満ちた三十代から、深化の五十代へ。とはいっても、この著作群の読者は様々なエッセイから構成される議論があまりにも多岐にわたり、川筋から溢れ出てしまうかのような振り幅の大きさに当惑するかもしれない。だが、その旺盛な生命力と好奇心にこそ、この行動派思想人の「翁童」的振る舞いがあるといふべきだろう。

翁童の輝きを一貫して説いてきた主張は、老いも若きも元気をなくしがちな時代に届くだろうか。世紀の変わり目を意識したシリーズの完結は、この社会の未来に向かって弓を引き絞っている。(新曜社、4500円)

◆かまた・とうじ一九五一年、徳島県生まれ。武蔵丘短期大学助教授。著書に『神界のフィールドワーク』(青弓社)など。